

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 92 号

2015年 3月



第 138 回観察会～安達太良・仏沢自然林観察会

3月15日(日)に第138回観察会「安達太良・仏沢自然林観察会」が開催されました。14名の参加者でした。

今回の観察会の地は、箕輪山と鉄山の間刻まれた仏沢の右岸のなだらかな斜面に広がるミズナラ林です。このミズナラ林はブナ林の伐採跡地に形成された代償林(二次林)です。朝からこの冬一番の快晴で、暖かい日差しの中、快適な観察会になりました。今回の最大で唯一の難所は箕輪山頂の大雪渓を源流とする仏沢に架けられた簡易橋です。幅30cm足らずでその上に雪が積もり滑落したら無事では済みません。一人ずつ慎重に橋を渡りました。橋を渡り終え、林道を進むと沢山の花芽を抱えたマンサクが私たちを迎えてくれました。残念ながら蕾はまだ開いていませんでしたが、ふっくらとした姿は開花が間近であることを予感させます。林道からなだらかな斜面を選びミズナラ林に入ります。真っ白な雪面に投影された伸びやかな木々のシルエットが解放感に満ちた童心に戻してくれます。ウサギの顔を連想させる花芽を着けたオオカメノキがここはかつてブナ林であったことを教えてくれます。雪面ではユキムシが匍匐し、キツネ、ノウサギ、ヒメネズミの足跡も観察することができました。標高差100mほどのささやかな山岳林の散策でしたが春に向けた生命の息吹をそこかしこに感じさせる観察会となりました。



ミズナラ林にて



ノウサギ



ヒメネズミ



キツネ

第138回自然観察会～安達太良・仏沢自然林観察会に参加して

安積幸子

何年ぶりかの観察会参加でしたが、素晴らしい青空、無風、真白な新雪、守さん曰く「今までにない最高の天気」とのこと。私にとっては懐かしいお仲間にもお会いでき大感激です。

雪の中から枝を伸ばしたマンサクの蕾をルーペで観ると、黄色の花弁が見え、柔らかい日差しにいつ花を咲かそうかとお隣さんの蕾と相談しているようです。

青空にヤマモミジ、ウリハダカエデの枝先が赤く、マクワウリに似たウリハダカエデの特徴ある木肌と共に、シミだらけの脳みそにも今のところは留まっております。

また、枝先に大きな芽を付けたホオノキ、オオカメノキ、ドライ花柄を付けたリョウブ、ツルアジサイ、山菜の季節が楽しみなコシアブラ。長年山歩きの際に、登山道に落ちている青緑の枝を不思議に思っておりましたが、その正体はアオハダと分かりすっきりしました。

私たちの足跡以外に、ヒメネズミ、ヒメネズミを追いかけて来たキツネ、柔らかい枝を食べたウサギの足跡など、自然界の生の営みが残されておりました。

雪上ランチタイムは、家庭料理回転バイキングと言ったところでしょうか、「手作り」「ヘルシー」「隠し味は愛情たっぷり」デザート付です！

お腹も満足したところで、雪の結晶観察です。ですが・・・あまりの暖かさで私にはよく見えませんでした。

土が見える所まで1.5m以上雪を掘り起こし、表層雪崩、全層雪崩を引き起こす雪面をまじかに観察することができました。

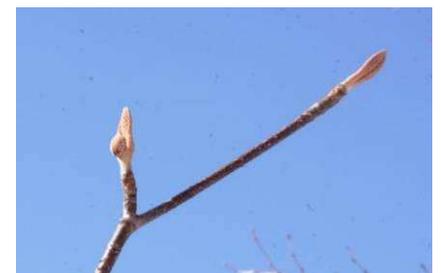
下山はスキー、スノーシューそれぞれあつという間に115号の駐車場に着きました。

自然観察とおしゃべりと楽しい時間は過ぎ、明るい日差しに脳みそも少し柔らかくなったかな？

次回の観察会も楽しみです！



スリル満点の橋渡り



オオカメノキの花芽と葉芽



セッケイカワゲラ(ユキムシ)



贅沢な昼食



食後の腹ごなし？



雪の硬さを手で測りました

クラシックコースを滑る 河上鏖治

(五色一沼尻スキーツアー)

昭和64年2月、吹雪の中を東京から来た山仲間4名と鉢森山の頂上に立った。鉢森山の中腹から麓にかけて、栗子スキー場として賑わっている。頂上には秩父宮殿下の登頂記念碑が建っていて、戦前は峠駅からのスキーコースとして知られていたが今はすっかり忘れ去られてしまった。この記録が有名な板倉勝宣の古典的名著「山と雪の日記・冬の日記」に詳しい。ここから奥羽本線を隔てて吾妻を望んで、噂に聞いていた日本有数の五色一沼尻コースを滑りたいとの希望が出され、機会を見て実施することを約束した。

五色スキー場はオーストラリア人、“オゴン・フォン・クラッツア”が初めてスキーを紹介し、明治44年日本では最初の民間スキー場としてオープンした。

明治13年に6皇族家の社交クラブとして六華クラブが設立され、冬の社交場としてクラブハウスが宗川旅館の隣に建設された。このようにして五色スキー場は大いに賑わったが、又五色温泉は吾妻スキー場のベースとしても重宝され、有名な“ウインクラー”が明治44年に五色温泉を訪れ、大正5年頃から高湯、微湯へのツアーコースが開拓され、この様子は前出の「山と雪の日記」に詳しい。

沼尻スキー場は大正9年早稲田大学スキー部の根拠地として盛んになった。この両基地を結ぶツアーコースとして五色一沼尻コースが結ばれ、吾妻におけるスキーツアーが本格化した。沼尻からは横向温泉を経由し箕輪山の西麓から鬼面山の尾根続きの台地に取り付き、大峠(旧土湯峠)を越して幕温泉に到るもので、土湯トンネルができるまでは、冬季野地温泉に行くにこのコースが利用された。

さて約束の五色一沼尻スキーツアーは平成5年3月6～7日に行われた。メンバーは東京から6名、福島2名の一泊組と、日帰り組が吾妻山の会会員4名の計12名である。一泊は慶応山荘で翌朝の天候は曇りだがそんなに荒れにはならないようなので予定通り出発した。8時10分。

山荘からは登山道に戻り少し登って、大根森の末端の追分から右(大根森の北側)に回り込み、大根森の北斜面を家形小屋目指して滑り出した。(家形小屋は下方で下りになる)家形小屋の下で身支度を整え本格的ツアー出発となる。

積雪は多く滑りやすい。最近積雪が少なくブッシュが多く雪中藪こぎの状態であったが、今回は積雪は多く滑りやすい。ブッシュがなく開けたところを快適の飛ばし緑樹山荘(東海大学所有一般非開放)に到着した。10時25分。軽く腹ごしらえしていると、後続チームと連絡が取れた。高湯スキー場の最終リフトの終点から緑樹山荘に向け一直線に進み、手前の尾根に出たところであった。暫くして林間から4名が滑り降りてきた。全員そろって11時10分出発。雲が厚くなり見通しが悪くなってきた。

このコースの指導標は「丸鉄板」と「五一沼」の鉄板打ち抜きの種類であるが殆んど無くなり、一箇所だけ「五一沼」指導標を見つけた。

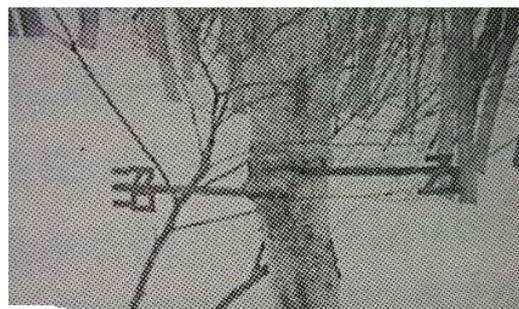
緑樹山荘からの下りは右手に開けた斜面があるのでブッシュを避けてこの斜面を下ったが、これだと下りすぎジークライト鉱山の下に出ると感じたので下降を留め登りなおして北に向った。このコースは尾根の麓を通るので沢が幾つか入り込んでいる。積雪が多いので小さな沢は埋まり楽に越せたが最後の大きな沢は何時もそうだが階段登行で苦労した。ここで昼食とする。11時55分～12時20分。

ガスはますます深く粒も大きくなってきた。高倉山の麓は風が強く笹原なので、何時もガラガラとクラストしているが今日は湿り雪であり、斜滑降で順調に進み最後の賽の河原へのシールをつけて登りにかかったが、ついに雨が降り出した。五色温泉への下りはべた雪に苦労したが全員無事宗川旅館に到着した。

ここから板谷駅までは車道が出来たが、スキーを担い歩くのも能がないので旧道を滑ることにした。もうツアーも終わりといい気分で滑っていたら最後に落とし穴が待っていた。吊り橋が落ちていて通行不能である。今され戻るわけにも行かないので、川を渡ることにした。水が入らないように靴の紐を締めなおし川辺に下りた。浅い所と向こう岸の上がられるところを選んで渡渉にかかった。吾妻山の会の1名は



家形避難小屋



沼尻-五色温泉コース標識

靴を濡らすのを嫌い飛び石伝いに渡ろうとしたが、危ぶんだ通り滑って川に転落、寒中水浴になってしまった。それでも何とか全員渡りきり崖をよじ登り、奥羽線の線路を横切ろうとしたら又一難。新幹線の開通で立ち入り禁止の柵が出来ていた。高さ約4メートル位でどこか切れているところが無いかと板谷駅に向かって歩き出した。この先に鉄橋があり、そこまで渡られなければアウトである。幸い鉄橋の手前によく柵が2メートルくらいの低いところが在り、乗り越えることが出来た。線路は列車に遭わないように見張りを立て、一人ずつ足早に渡った。板谷駅に時間ぎりぎりに到着し、とにかく無事終了を祝った。山は変わらないが麓は全く変わってしまった。明治どころか、昭和も遠くになってしまった。昔を懐かしむだけである。教訓 古い人の言う事と、古い地図は信用するな。

里山植林地の現在

佐藤 守

昨年11月に、総会前の観察会候補地に予定されていた狐郷山を下見に出かけた。残念ながら、登山道はアズマネザサに覆われ荒廃が進んでおり、そこでの観察会は諦めざるを得ないと判断した。代替地を見つけようと地図を頼りに周辺の里山を物色しているうちに「立子山」と書かれた案内プレートを見つけた。



立子山里山(東館・西館・不亡園)整備事業
福島県地域づくり総合支援事業

期待を込めて散策路に入った。開かれた広い散策路周辺に散在する広葉樹を楽しみながら歩む。ほどなく道の両側に学校の卒業記念植林を告知した標柱と看板が現れた。左側の白い標柱には前面に「立子山中学校総合学習(ヒノキ)」側面に「平成18年5月24日」とある。植えられたヒノキは順調に生育していた。そこから少し登ったところにも「立子山小学校記念植樹」の白い標柱があり、そばに案内板が設置されていた。案内板には「館の山植林事業、この事業は(社)福島県緑化推進委員会から緑の募金交付金の助成を受け、立子山

小・中学生の自然観察学習の場作りを目的に、森林ボランティアの協力により実施されたものです。平成18年4月16日」と書かれていた。こちらの植林地には何が植栽されたのか不明だが一面クズとアキノキリンソウ畑と化していた。さらに登り、山頂の広場に出ると四阿(あずまや)が設置され、軒先には「立子(西館)学舎」と掘られた木製の重厚な案内板と駒米館(西館)に関する歴史を記載した説明板が掲示されていた。これによると、この一連の整備事業は福島県地域づくり総合支援事業として平成18年に実施されたい。平成18年といえば会報91号で紹介した鳩峰峠で高山の原生林を守る会が植林を始めた年と同年である。いずれの植林地も植林後、管理の手は入っていないが、鳩峰峠の方は植林された広葉樹は順調に生育しているのに対し、こちらは残念ながら「自然観察学習の場作り」には程遠い結果となっている。何故、このような対照的な結果となっているのかその原因を考へてみることは植林を参加者の単なる自己満足に終わらせることなく本来の目的である自然林の再生を達成する上で大切なことではないかと思う。



館の山植林事業(立子山小校記念植樹)

1993年(平成5年)の白神山地のユネスコ世界遺産指定をきっかけに植林ブームが全国を席卷し、環境税を徴収する自治体も多数に亘っている。あれから20年近く経過し、その植林地は現在どうなっているのか点検が必要ではないだろうか。東日本大震災を機に植林活動復活の兆しがみられるが、過去の植林の失敗を繰り返さないためには植林地周辺の自然環境に対する冷静な分析と植林地の長期的な点検計画の構築が必要である。



ネームプレート



クズとアキノキリンソウ畑と化した植林地



立子山中学校記念植樹

東日本大震災・大津波から4年が過ぎました。新地町では高台移転や災害公営住宅の建設が順調に進んだので、8地区あった応急仮設住宅を2地区に集約することになりました。空家率が7～8割を越えたそうです。そういえば、仮設住宅の灯りが少なくなり、駐車場に車がないように思いました。入居率が低いとコミュニティの維持が難しくなり、防犯・防火の面でも心配があるそうです。我が家の近くにある仮設住宅は残ることになりました。そこはペットを飼っても良い住宅です。津波で家を失った方々だけでなく、放射能汚染からの避難をしている方も住んでいると聞きました。やがて全員が落ち着く先が決まれば仮設住宅は解体され、更地に戻ることになります。あと1、2年はかかるのでしょうか。集団移転の造成はすでに終わり、新しい家がたくさん建ち並んでいます。テレビのニュースでは高台移転の話がまとまらず、自宅の再建ができなかったり、人口流出が多くなったりした話を聞きます。4年も過ぎてもなお、先が見えない生活をするのは大変なことでしょう。

さて、2月の広報では「どんぐり育て隊」の募集がありました。新地町や周辺で拾ったコナラやクヌギ、アラカシのどんぐりを苗木に育てて、育てた苗を釣師・浜浜防災緑地に植樹しようというプロジェクトです。今月、3月15日(日)はどんぐりの植え付けをする日でした。新地町役場復興推進課前駐車場に汚れてもいい格好で集合と書かれてありました。一人あたり20ポットで1ケースを基本とし、植えたどんぐりを自宅で15ヶ月育てて、来年6月に植樹になる計画です。この日は高山の自然を守る会の第138回自然観察会の日でもありました。残念ながら「どんぐり育て隊」の活動には参加できませんでした。広報には「どんぐりを育てると言っても、芽が出なかったり、海辺の厳しい環境のため枯れてしまったりとさまざまなハードルがつきものです。育てた苗木が全部大きく育つ訳ではないですが、みんなで育てる、私たちの防災緑地として、今後も見守っていただければと思います」と書いてありました。

当会でも2002～2008年の7カ年にわたって鳩峰峠の牧草地で植林を行いました。鳩峰牧場を元のブナ林に復帰させ、福島市の水源地を守り、野生動物の生息場所や移動空間を作るのが目的でした。会報「高山」91号(2014年12月発行)にはその鳩峰牧場に植林した樹木の成長の様子が掲載されています。

12年前、みんなでマザーツリーの周辺にあったブナの芽生えやイタヤカエデ、ミズナラなどをポットに植えて育てました。私は、面倒を見切れずに枯らしてしまったものもあったのですが、ブナとイタヤカエデを育てて植樹しました。ブナはなかなか伸びてくれなかったのですが、イタヤカエデはぐんぐん大きくなったのを感じています。

植林の仕事は大変でした。3、4名がひと組になり、苗・肥料とスコップを持って牧場の斜面を登り下りました。5m間隔で植えるのですが、土が硬くてスコップで穴を掘るのが容易ではありませんでした。穴を掘る係を交代したり、男性に手伝ってもらったりしながら苗を植えたのを感じています。

昨年、第136回の自然観察会で鳩峰牧場に行きました。ミズナラの木が大きくなって、なんと、どんぐりが実っていました。樹高もあり、葉がたくさん茂っていました。汗ばむほどの陽気だったので、私たちはその植樹したミズナラの木陰で芋煮会をしたのです。ミズナラの木陰はまだ全員を覆うほどの大きさはありませんでしたが、芋煮のコンロに当たる風を柔らげ、私たちを直射日光から守ってくれました。最初に植林した年から10年以上がたち、若木としてどんぐりを実らせ、私たちを待っていてくれたこと、そして、その木陰で楽しく芋煮会をしたことを本当にうれしく思いました。

大津波に襲われた我が故郷にも、来年はどんぐりから育てたコナラやクヌギの苗木が植樹されます。10年もすれば若木としてどんぐりを実らせるでしょう。実は小動物のえさとなり、落ち葉は肥料となり、大きくなるに連れて地中深く根を張り、減災の役目を果たしてくれると思います。どのような防災緑地公園になるのかを見守って行きたいものです。(2015.3.25 記)



自宅で育てたブナの苗木：樹高約20cm
2006年6月4日鳩峰牧場植林地で撮影



津波後の沿岸部は防災緑地公園になる

「大震災が教えてくれたもの」(13)

原発事故から4年を経過して 奥田 博

今年3月11日の朝日新聞には福島県民世論調査で、放射性物質が家族や自分に与える影響への不安を尋ねたところ、「大いに感じている」は29%、「ある程度感じている」は44%で、「感じている」は計73%にのぼった。「感じていない」は、「あまり」21%、「まったく」の5%を合わせて26%だった、という記事が掲載された。また国民の間で原発事故の被災者への「関心が薄れ、風化しつつある」は71%で、一昨年、昨年と同様、7割を超えた。「そうは思わない」は24%だった。福島第一原発の事故は「福島の事故」ではない。「日本の事故」であり、しかも人類史に残る原子力災害である、とも述べている。

事故から4年がたつ今なお、12万人もの福島県民が避難を強いられ、全都道府県に分かれて暮らす。事故の被災者のためのわずか4890戸の復興公営住宅でさえ、完成したのは260戸余り。そんな問題の深刻さに反して、年末に行われた選挙結果を見ても、原発問題が争点化することはなかった。一方で、政権は着々と再稼働へ向けた手続きを進めている。意識の変化という意味では、放射能の影響に関心を持つ人が急増し、原発反対のデモに多くの人が集まった。震災前は考えられなかったことだし、世論調査でも半数以上が再稼働に反対だと答えている。しかし、こうした声が代表制民主主義に生かされない。本当に原発のリスクを減らしたいなら、「原発やめろ」と叫ぶだけでは力にならないことが明白になった。



問題は単純ではない。なぜ原発前を通過、使われていない送電線が過疎地に集中しているのか。リスクを押しつけられている地元住民がむしろ再稼働を望むのはなぜなのか。原発の交付金がなければ明日の暮らしに困る過疎の現実。都市住民も地元住民も一致できる着地点を探さなければ、政治を変えることなどできない。いったん頼った原発をゼロにすれば、雇用や経済などで発生するコストを分かち合う覚悟が問われる。現存するリスクを薄く広く「痛み分け」することも考えねばならない。被災地外の人が震災がれきを受け入れることを拒んだり、被災地の農産物を買うことを過剰に避けたりすれば、痛みを押しつけた人をさらに踏みつける結果になる。やせ我慢であれ、そんな心を持てるかが問われている。1回の選挙ですべてが変わるような問題ではないので、あきらめてしまうのは政府の思いつきです。原発のリスクを減らすことは誰もが望んでいるはず。投票にあたっては、私たちはどういう社会を選ぶのかという戦略的な視点を持たなければならない。たとえばアベノミクスは、格差の解消よりもまずは富裕層を増やし、その富をいづれ広く行き渡らせるといふ。うまくいったとしても、都市と地方の格差の中で原発をつくり、見返りの交付金で地元は身動きが取れなくなった歴史を繰り返すことにならないか。

昨年末に国道6号線が南北に繋がったので、車で走ってみた。多くの車両が行き交い、渋滞こそ起きてはいなかったが、4号線並みの通行量だった。多くは原発廃炉や除染に関わる業者だろう。3月13日には中間貯蔵施設福島県内の除染で出た汚染土などを、初めて同県内の建設予定地内に運び込んだ。この日を起点に最長30年にわたる保管が始まれば、さらに交通量は増える。原発入口を越えると車内で5 μ Sv/hを越えていた。

原発前を通過、使われていない送電線



富岡駅は改札口もホームもそのままだった。(年末撮影・年初から撤去工事が始まった) 後ろには黒い袋が山積みだ。



檜葉町の天神岬から見下ろす。眼下には除染袋がグリーンシートに覆われて並ぶ。遠く三森山から屹兎屋山の尾根

フッキソウ (*Pachysandra terminalis* ツゲ科フッキソウ属)

コナラ林からミズナラ林の半陰性の湿った林床に植生する常緑小低木。名前は草であるが幹が肥大し、挿し木繁殖できることから木本に分類される。株全体の外観はチングルマよりは樹木のように感じられるが、茎が柔らかいのが草を連想させるのかもしれない。吾妻・安達太良山域では意外と自生地は少ない。落葉で被われた湿地を好む植物であることから、周辺の樹木伐採に伴い生育地の腐葉層の分解と乾燥化が進み好適環境が少なくなってしまったのだろうか。根茎と種子で繁殖する。

葉は互生である。地下茎の節から地上部に茎を分岐する。地上茎の下部はほふく性で上部は立ち上がる。葉は下部に数枚の葉群を形成し、更に茎が伸びて上部の葉群を形成する。上部の葉群は間隔が密になり輪生状になる。葉形は卵状楕円形で葉身の中央部から先端までは粗い鋸歯がある。基部は楔形に葉柄に流れる。葉は革質で厚く、表面は光沢がある。茎、葉ともに無毛である。

花は頂性。先端の葉群から花茎を伸ばし穂状花序を形成する。雌雄異花で雌花は花序の基部に数花着生する。その上に多数の雄花が穂状に着生する。花弁は無く、4枚のがく片が雄しべと雌しべを包む。雌花は2本の花柱が先端で反り返り1つの雌しべの先端が分岐しているように見える。雄花は4個の雄しべを持つ。雄しべの花糸は白く太く、葯は赤紫から小豆色で雄花はよく目立つ。属名はギリシャ語で太い雄しべを意味し、雄しべの形態が由来となっている。種小名は頂生を意味する。開花期は融雪後間もない時期で極めて早い。果実は核果で種子は1個。1つの花序に付ける雌花の数は数個でどの花序でも限られているのに対し、雄花の数は花序による個体差が大きい。これは開花期が受精環境に恵まれないことから、養分ロスを最小限に抑えるための繁殖戦略らしい。このような雌雄比の偏りは開花期の早い雌雄異花の樹木に共通しているように思われる。

スプリングエフェメラルを求めて、ミズナラ林を散策していたところ、偶然にフッキソウの花に遭遇した。葯の色が何とも渋く、雄花にすっかり目が奪われてしまい、その下に雌花が隠れていたのに全く気付かないでいた。今度は雌花をよく観察してみたいと思うが、その機会にうまく恵まれるだろうか。

ササバギンラン (*Cephalanthera longibracteata* ラン科ギンラン属)

コナラ林からミズナラ林の林内に生育する夏緑多年草。伐採跡地に形成された二次林を好んで植生する。ササバギンランは、炭素源は自らの葉による光合成により同化し、窒素源は外生菌根菌と共生してラン菌根を形成して樹木の根から吸収する混合栄養性植物として知られている。菌根菌とは植物の根に菌根を挿入し、植物から栄養分を吸収する機能をもつ菌種である。菌糸が植物の根の細胞まで入り込むのを内生菌根、細胞の中まで入り込まないのを外生菌根として分類する。外生菌根はキノコを形成するが、内生菌根はキノコを形成しない。吾妻・安達太良山系では類似種のギンランよりも個体数は少ない。

葉は互生。葉形は広披針形で平衡脈が走り、笹の葉に似る。基部は茎を抱く。株の基部より上部の葉の方が葉身が長く、最上部の葉は花序より高くなる。葉数は6~8枚である。葉縁は全縁でゆるく波を打つ。葉色は明るく爽やかな緑色である。ギンランの葉はササバギンランより短く葉数も数枚と少ない。また先端の葉は花序より低い。

花は頂性で、茎の先端に総状花序を形成し数輪の白い花を咲かせる。開花期でも花は開かないことが多い。花序の基部に着生する苞葉は、ギンランは短く、ササバギンランは細く花序より長いのが特徴。ササバギンランの種小名は長い苞を有することを意味し、苞の形態が由来となっている。ランの花の形態はユリ科と同様に3数性でそれぞれ3枚ずつの外花被、内花被で形成される。内花被の中央の1枚は唇弁と呼ばれ、独特の形態変化をする。他の2枚は側花弁と呼ばれる。外花被は中央の唇弁と対になるのが背がく片、他の2枚が側がく片と呼ばれる。雄しべと雌しべは合体し、ずい柱を形成する。花粉は粉とはならず粘着部分を持った花粉塊となる。

花の写真撮影を始めた今から30年近く前、よく高山に散策に出かけていた。春になると決まってギンランの群落に遭遇した。そんなある日、背が高く品のある装いをした株に出会った。それがササバギンランであった。それ以来、再会した記憶がない。



第 139 回自然観察会案内：北霊山・霊山のスプリングエフェメラル観察会

日時：2015年4月12日（日）7：30～15：30

集合場所 小島の森駐車場 集合時間 7:30 参加定員 20名

内容 霊山の北方斜面に広がる自然林のスプリングエフェメラル植物群を観察します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋(軍手複数)、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用:保険代等(500円:2014年総会にて観察会参加費が500円に変更となりました。)

申し込み:4月11日(土)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

第 140 回自然観察会案内：斜平山・米沢のスプリングエフェメラル観察会

日時：2015年5月10日（日）7：00～16：30

集合場所 国道13号でん六跡駐車場(高速道路高架橋を過ぎて左側) 集合時間 7:00 参加定員 20名

内容 斜平山の新緑とスプリングエフェメラルを観察します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋(軍手複数)、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用:保険代(500円)

申し込み:5月9日(土)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

東大巔湿原植生回復処理のその後

会報62号で報告しているように福島県自然保護課では2003、2007年の2回に亘り、東大巔湿原の植生回復事業を実施している。この事業は「吾妻山の会」と当会の2団体のボランティア協力のもとに行われた。当会は最もデリケートな池塘崩壊部の回復処理を担当した。回復処理前の2003年当時、その池塘は登山者の蹴りこみによりダム役割を担っている周辺泥炭部の一部が崩れ、スゲ類の植生も失われかけて池塘水の流出は時間の問題となっていた。2003年の1回目の植生回復ネット被覆処理により泥炭層の崩壊の進行は抑えることができた。2007年は更にスゲ類の植生を回復するために植生回復ネット被覆の追加処理を加えた。

回復処理から7年が経過した2014年10月にこの湿原を訪れる機会があり、その池塘を確認したところ、見事にスゲ類の植生が回復していた。たった一つの池塘のごく一部の植生崩壊であっても、高山という厳しい条件のもとでは植生回復に10年を要したことになる。



決壊寸前の池塘
(2007年6月3日)



植生回復ネットの敷設処理
(2007年6月3日)



回復したスゲ植生
(2014年10月12日)

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第92号 2015年3月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188 (夜間7時～9時)

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費(500円)を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・鈴木